

# 大谷學報 第十七卷 第三號

## 三河國に於ける眞宗教團の發展 (中)

日 下 無 倫

### 中 篇 目 次

第二章 專信及びその直流

第三章 荒木門徒の移住

### 第二章 專信及びその直流

一

三河和田の圓善を鼻祖とする和田門徒の消長發展については、前章に於て、既にその概略を説いたから、今より圓善を出した師匠の專信と、その直流の、三河に存在し發展した事實の一端を記してみたいと思ふ。

專信は遠江國鶴見の人で、俗名を彌藤五といひ、出家後の法諱を專海と言つたが、專信といふは即ちその房號である。『本願寺通記』卷七によると、安貞元年(宗祖五十五歲)顯智と共に親鸞聖人の弟子眞佛の門下に投じ、翌二年

三河國に於ける眞宗教團の發展

また顯智と共に直接聖人に師事して、常にその法澤に浴したといふが、しかし其の頃顯智は生れて漸く三年にしかならぬから、その年代に就ては直に之を信用することは出来得ないにしても、彼が眞佛の門下であつて、しかも親鸞聖人面授の弟子たりしことは、現存せる各種の『親鸞門侶交名帳』や、または顯誓の『反古裏』に「かの專海は常州眞壁の眞佛聖の弟子、聖人の御在世ことに昵近の孫弟也」とあるに徴しても明らかである。

『存覺補日記』によると、建長七年畫工朝圓法眼によつて親鸞聖人八十三歳の眞影を書寫せしめたことを記載してゐるが、その時の願主といへば恐らく專信であらう。專信は親鸞聖人より御恩免の壽像をば大切に保存し、聖人御入滅の後には、その幅の卷留のところに、自ら「弘長二歳十一月二十八日未時御入滅御歳九十」と書添へ、これを無二の家寶として相傳したのであるが、專信の子孫の住地が三河國碧海郡安城附近にあつたから、後世この御影を親鸞聖人安城御影と稱し奉つた。『反古裏』に、顯誓が殊更に安城をば安靜の字に書き改めて、一方『三帖和讃』を御製作なされし歡悅の御姿を書せるものとし、また重ねて『愚禿鈔』脱稿の愛悅の御容貌をあらはせるものだと言つて、歡悅愛悅の二つの意味を「安靜」の二字に附會せしめんとしたのは恐らく謬りといはねばならぬことであつて、全く御影相傳の地理的關係から、「安城御影」といつたやうな特殊の呼名が出来上つたものと考えざるを得ないのである。

翌年の建長八年丙辰四月七日、下野高田の覺信からの書狀に對し、五月二十八日付を以て返事を認められた親鸞聖人の御消息に、(高田專修寺所藏の御眞筆消息、『末燈鈔』第十一通、並に『異本御消息集』參照)

「專信房、京チカクナラレテ候コソ、タノモシクオホエ候」

とあるのは、遠江國鶴見(或は池田庄桑畑)に住んだ專信が、三河國安城へ移住した時、門侶の覺信へ賜つたものと推

せらるるから、專信が三河への轉住した年時も亦建長八年であつて、實に親鸞聖人八十四歳の御時であつたことが知られる。『三河念佛相承日記』によると、專信はその師眞佛や同門の顯智と共に、建長八年丙辰十月十三日三河藥師寺にして念佛を創めるとあるが、それは明らかに、專信の三河へ移住してから後の出来事であると見ねばならない。

同じく親鸞聖人より十一月二十五日付を以て、眞佛御房へ與へられた御返事の中にも、『末燈鈔』第十七通、『御消息集』第十六通参照）

「ナニゴトモ、專信房ノシバラクハ、<sup>(居)</sup>キタラントサフラヘバ、ソノトキマフシサフラフベシ。アナカシコ〜」

といつて專信の名が見えてゐる。思ふに宛名の眞佛は正嘉二年三月八日に往生したものであるから、この御消息は正嘉元年以前のもつと見なければならぬ。しかもかの『三河念佛相承日記』の記事によれば、眞佛等主從四人打揃つて上洛し、間もなく顯智を残して眞佛專信等三人の下向したのが建長八年十月以後(その年内)であるとのことであるから、この御消息を以て建長八年のものと考えすることは出来ない。しかるに、その前年の建長七年といへば、親鸞聖人の壽像恩免のために、願主專信が正しく上洛し滯京した年であつて、しかも一方、御消息に「專信房ノシバラクモキタラント候ヘバ云々」の文字があらはれてゐる以上、この年時不明の十一月二十五日付の御消息は或は建長七年のものではないかと考へられぬでもない。しかしさうした推定は言はば予の私見に屬するから、穴勝にこれを強ひんとするものでなく、他日の研究に俟つことゝしよう。

以上に述べた所の親鸞聖人の書狀二通、ならびに、特に壽像恩免の事實を併せ考ふるならば、親鸞聖人と專信との關係は全く『反古裏』にいふところの昵近の孫弟であつて、遠州の鶴見、三河の安城より時折上洛した專信房專海

は、殊の外宗祖親鸞の御氣に入りて、常隨給仕といふやうな親しい間柄であつたことが想像さるるのである。

古來高田專修寺に所藏さるゝ『教行信證』六卷はいはゆる親鸞聖人眞蹟の清書本と傳へられ、曾て東京の史料編纂所長辻善之助博士によつて亦之を認めらるゝ所である。しかし『顯正流義鈔』によると、建長七年乙卯冬比、眞佛上人顯智上人並ニ與へ給フとありて、眞佛顯智兩上人への傳授を説いてゐるが、この時に專信房も亦教行信證の傳授をうけられた形跡がある。(このことについては他日の研究發表に譲つて今は言はず)。所謂安城御影の免許も建長七年であり、御本書の相傳も亦建長七年であるとすれば、この年こそは專信にとつて、忘るゝことの出来ない記念すべき年であつて、彼はかうした二大相傳によつて、如何に宗祖よりうけた知遇に感泣したことであらう。高田專修寺所藏の『教行信證』第一、三、五の三卷の奥書によると、

「親鸞御入滅弘長二歲<sup>壬午</sup>十一月二十八日<sup>午時</sup>御年九十歲也、同廿九日<sup>午時</sup>專信遠江國池田住持顯智下野國高田住僧御舍利

藏畢」

とある。

此の奥書は本文と別筆であつて、私見では顯智のかいたものによく似てゐると思ふが、兎に角宗祖は十一月二十八日午時の入滅で、翌日午時に專信と顯智とが舍利藏即ち納骨を行ふた事を示した言葉である。今日の午時に入滅せられたものを、すぐ明日の正午に納骨するといふことは到底あり得べからざることであるが、思ふにこれは當時の記憶の失か、または誤傳によつて書かれたものであつて、聖人滅後多くの年時を経てから記載されたものであらう。さうした時日の誤記を穿鑿することは目下の所要でないが、しかし專信が宗祖の御往生や御葬送に際して特に幹



施し盡力した功績については、この奥書を通して能く伺ひ得らるゝことと思ふ。かくて宗祖の示寂に遅るゝこと三年、文永二年三月十七日に至り彼は往生したのであるが、享壽は全く不明である。門下には和田門徒の圓善を初め、信樂、性信、覺信等を出してゐるが、妙源寺並に光明寺所傳の『親鸞門侶交名帳』によれば、更に了善、信淨の二人を擧げてゐる。了善は三河國碧海郡矢作町大谷派勝蓮寺に傳來するところの十五高僧像一幅に見ゆる了善のことであらう。該幅によれば、中央には曇鸞、道綽、善導、少康、懷感の支那五祖像を出だし、下段には聖德太子、妹子、學呵の三人と、上段には源信、源空、親鸞、眞佛、專海、了善、佛性の七人との像をいだして、上下兩段すべて和朝の先德である。圖中、了善と佛性との札銘には敬語がないから、了善、佛性の兩人は共に專信の門下であるのか、或は了善は專信より教へをうけ、了善は更にそれを佛性に傳へたものか、何れとも明らかに示されてないが、しかし此の了善が『親鸞門侶交名帳』に見ゆる專信門下の了善と同一人であることだけは説明するまでもないことである。矢作町勝蓮寺の寺傳によれば、當寺は寛仁年中の創立で、天福元年に至り惠眼といふものが宗祖に面授して弟子となり、遂に改宗して淨土眞宗になつたといふけれども、その實、專信の弟子了善を以て當寺の開基とせねばならぬ。而して了善より法をうけたか、或はその同僚たりし佛性は、尾張國知多郡小林の里に光明寺を開いて、三河よりも寧ろ尾張へ教線を擴張した。同國幡豆郡平坂村大谷派無量壽寺も亦源光坊了善(生國不詳、姓は大河内氏といふ)といふものの、開創した所と傳へらるるけれども、この源光坊了善が果して專信門下の了善であるかどうか此亦明らかでない。

次に信淨は、專信が遠州鶴見在住の時代に弟子となつたもので、その師の專信が三河へ移住した後には師跡を繼いで遠州に留まり、専ら念佛を弘通したといふことである。遠州濱松市松林寺所藏の『過去帳』によると、彼は康永三

甲申年十一月二十七日に往生したといひ、濱松市の善正寺所藏の『同寺略年譜』によると、明徳二年八月十五日に示寂したとある。その中いづれが眞を傳へたものか明らかでないが、恐らく前者が眞に近いものであらうと思はれる。

專信門下の圓善及び和田門徒の發展事情に就ては、『三河念佛相承日記』いはゆる貞治の古記録によつてその大略を知ることが出来、了善と信淨のことも亦多少ながら知ることが出来たけれども、信樂、覺信の二人に至つては、單に覺信より覺妙をだしたといふことが『親鸞門侶交名帳』によつてわかるのみであつて、その他の點については全く不明である。

抑『三河念佛相承日記』といへば、その著者は内題に「三河國專修念佛根源事」と標して置きながら、三河にその門流を残した專信及びその門下の念佛弘通の狀況については一言もこれに言及せず、圓善の子信願、念信の兄弟が高田顯智の教化をうけて念佛を相承した事實を詳記し、更に進んでは「三河より高田へまいる人々の事」と標して、高田參詣の三河門流のことのみを記載して、一言も京都の大谷廟堂について言及してゐないのは誠に不審にたへない事である。けれども本書が親鸞聖人滅後百餘年、既に三河教團中に高田對本願寺といつたやうな對立的な宗派氣分が醸成された時代に高田系統の手に成つたものとするならば、これ亦已むを得ないことであつて、顯智相承の高田系の人の手に成つた貞治の古記録に、專信及びその門下に於ける念佛弘通の一面が載せられてないからとて、當時それが全く不明なりしたためでもなく、これはたゞ大谷影堂を中心とする本願寺教團に傾いた專信及びその門下に對し、言はゞ宗派的偏見から、わざとこれに言及することを差し控へたまでである。けれどもそれはやがて今日よりこれを見れば、徒らに史家をして史料の缺如を歎かしむるの結果を招くにすぎないものとなつて、吾等をして何

等をも裨益するところはないのである。されば三河にその門流を残した、いはゆる專信門下の念佛弘通の全面的考察はしばらくこれをさし置き、唯その直流のみが專信門下の主流として、大に大谷本廟のために盡し得た一面について考究することにとどめたいと思ふ。

## 二

專信の遠州の鶴見から三河へ移住した年時が大體建長八年頃であるとの予の推定は前に既に説く所であるが、それより入滅に至るまで大凡十年間を、彼は三河にあつて念佛弘通に盡力したものであらう。その住地は普通には安城といはれてゐるが、しかし專信を開基とする寺院に同國碧海郡矢作町大字長瀬に西派の願照寺といふものがあつて、今現にその直流が連綿として今日まで相續いてゐる以上、彼はこの長瀬を住地とし道場として大いに教線を張つたものであらうと思ふ。『存覺初日記』には「親鸞聖人安城御影」の相傳の次第をあらはして、

上人―專海―性信―唯覺―照空

相傳如此也

照空 文和四年  
四十三歳

といふが、これにあらはれた系譜こそ正しく專信の法統を傳へた直流と名づくべきものであつて、いはゆる草創時代に於ける願照寺の世代系譜も亦これに外ならないのである。該系譜に見ゆる性信は即ち專信の實子であるが、各種『親鸞門侶交名帳』の專信門下に出づる性信と全く同一人であるから、性信は父專信より念佛を相承した正しき眞弟といはねばならぬ。

專信の直流がその原始時代に於て京都の大谷本廟に盡した功績はなか／＼大したものであるが、性信の子唯覺を

經て照空の代に至るや、京都本願寺との往復がいよく頻繁となつて往つた。

照空は正和二年の生れで、顯誓の『反古裏』によればまたこれを照心房とも呼んでゐる。甲斐國萬福寺所傳の『親鸞門侶交名帳』では、性信と照心房とを同一人に見てゐるが、此れは恐らく顯誓の誤記であらうと思ふ。『存覺二期記』によれば、照空は觀應二年正月の頃には大谷本願寺に伺候してゐたものであつて、覺如宗主の御不豫と知るや、直に書狀を認め、專使寶壽丸をして河内國の存覺宿所に走らしめたのは全く照空の取計ふ所であつた。觀應二年正月十九日覺師の御入滅について、葬式納骨等の萬端を御世話申上げたことは今更申すまでもない。

それより三年の後、文和三年九月四日照空は年四十二歳にして上洛したが、その時專信以來相傳するところの「親鸞聖人安城御影」につき、存覺上人に一部始終を申上げたところ、その後、存師には拜見の志愈々切なるものがあり、寤寐にも忘れることが出来ないと見えて、同年十月には夢想を感じ、同月二十八日には康樂寺の淨耀に命じて「夢想感得の親鸞御影」を畫かしめられた。今京都西六條の常樂寺に現存する處の影像是即ちそれである。（『異本反古裏』による）

越えて文和四年八月、照空は去年の約束を奉し、御影を供して上洛したが、存覺上人は恭しくこれを拜見し、隨喜の涙を流して、上下の銘文や御調度のことども委しく記しおかれたのであつた。『存覺袖日記』に見ゆる存覺六十七歳御執筆のところは即ちそれである。

照空と本願寺、殊に存覺上人との間柄が極めて昵懇であつたことは、上來説く所の「親鸞聖人安城御影」傳來に關する一件記事によつてもその大體を知ることを得るが、さて照空の晩年の事情や、その示寂の年月日については少

しも知ることとは出来ない。

願照寺の寺傳によれば、開基を專信、第二世を照心即ち照空とし、ついで專念、專正、存了、蓮心、正了、正從、正榮、正玄と次第してゐる。今しばらくさうした寺傳によりて照空のことを申すならば、照空は建長元年專信房四十一歳の子であり、幼にして南海坊と號した。これは建長六年照空六歳の時に親鸞聖人の名付け給ふ所であるといふ。かくて永仁三年九月九日開基專信の示寂と共に、彼は四十七歳にして父師の遺跡を繼ぎ、嘉暦二年七月十日七十九歳にして歿したのだといふてゐる。思ふにこれらの寺傳は、たとへ專信、照空等の誕生、示寂の年月を明らかに記載してはゐるが、しかし『存覺補日記』『存覺一期記』等當時の記録に一致してゐないから、到底これを確實な史實として受け入るゝことは出来ないものである。殊に照空を開基專信について願照寺第二世とする所などは、當時性信唯覺の世代が不明であつたに因るにもせよ、全く時代觀念を没却せるものなした業といはるべきものであつて、如何にも噴飯に堪へないものがある。

### 三

かくて照空より專念、專正、存了、蓮心の四代を過ぎて、寺傳にいふ所の第七世正了（實は第九代）の代に至るや、去ぬる文和四年八月存覺の拜覽を得た專信相傳の「親鸞聖人安城御影」も、再び山科の本願寺にのほせられることになり、文明十二年十月その裝潢を修覆すると共に、また別に模寫本二種を作らるることゝなつた。一は山科本願寺に安置し、他は富田の教行寺に置かれたのである。今現に本派本願寺に「安城御影」の副本と傳へ、蓮如上人眞蹟の銘文のあるのは即ち當時山科本願寺に安置した所のものである。而して本派本願寺に傳へらるゝ「安城御影」の

正本には左の如き蓮如上人御自筆の裏書がある。

右斯御影者、去寛正二歲十月之時分雖奉修復、今破損之間、重而奉修復處也

文明十二年<sup>己</sup>亥十月十五日書之訖

隱 上 (蓮如  
花押)

これは蓮師時代に召しのほせられ、修復の時に蓮師自ら裏書したまふ全文である。寛正二年といへば宗祖親鸞聖人二百回の忌辰に相當するから、さうした因縁の年に一度修復を加へたものだが、それより十九年の後に重ねて修復を加へたものであらう。かくてこの「御影」は一旦三河國願照寺正了の手許に返へし下されたが、ついで實如宗主の時に至り(永正二年)、同じき「御影」懇望のことを、三河國土呂本宗寺住職實圓權大僧都(第九世實如宗主第六子)を通じて仰せ出でさせられ、宗主の懇望もだし難く、遂に願照寺の寄進によつて、茲に、存覺蓮如兩上人愛翫の靈寶は永く本寺に歸することとなつた。此の時三河の願照寺へはその代用として新しく親鸞聖人の御影一幅が下附されたのであつた。今現に當寺に藏する所の三狭間の御影と稱するものは即ちそれであつて、左の如き實如宗主の裏書がある。

釋 實 如 (花押)

永正十五年<sup>寅</sup>戊五月廿八日書之

大谷本願寺親鸞聖人御影

三川國碧海郡碧海庄  
長瀬願照寺常住物也

願主 釋 正 了

その裏書に見ゆる願主の正了は願照寺第六世蓮心に繼いで住職となつた人であるが、同寺の寺傳によれば、永享十二年蓮心の子として生れ、長祿元年の春十八歳にして同寺を董することとなり、寺務を執ること五十八年、永正十一年二月十八日竟に七十五歳の老齡を以て示寂したといつてゐる。しかるに翻つて惟ふに、裏書に「永正十五年五月願主釋正了」とあるのはいかにもをかしたことである。若し事實永正十五年の下附であるならば、願主の名は當然願照寺第八世正從でなければならぬ筈である。而して又た一方「願主釋正了」として誤謬なきものとするならば、その年號を永正十一年以前に遡らなければならぬこととなる。これについて西本願寺の記録簿には「安城御影」に關し、明らかに「正了寄附之」とあるといふから、或は正了の時既に本山へ寄連のことを申出でられたるも、これを履行するに至らずして示寂したので、次代の正從が父師の約束を果し、その願主の功をば全く父師に譲られたものではなからうかと推し得られぬでもない。

かく「安城御影」上納の功績を父師に譲り、自ら子としての孝道を完了した正從といふは、正しく願照寺第八世を襲いだ人である。同寺の寺傳によれば、文明十六年正了法師四十五歳の子として生れ、永正十一年春、歳三十一にして住職となり、「安城御影」寄附の一件を契機として、大に故專信房の遺跡發揚に努めたが、本山亦その由緒を認めて、寺跡の昇格を許したので、寺運は益々隆昌に及んだ。これ全く正從の功績に俟つものといはねばならぬ。彼の一生は本願寺の實、證、顯の三法主に互り、寺務を執ること五十有八年、天正元年八月二十日九十歳の老齡を以て入滅した。

かくの如く專信房の遺跡願照寺が、正了、正從の二代に至りて、寺基の強固と寺運の發展を促した所以のものは、

一つはそれら世系の人々の奮闘努力に依るところ多きものあるとはいへ、又一つは、文明十八年、當寺が備後國福山城主阿部家遠祖の菩提寺となりて、同家中興の祖、山城守入道道心以下五代の主君の墓地を有するといふ事情に基づくものであるといふことを忘れてはならぬ。

阿部氏の祖先は藤原氏で、阿部氏中興の祖山城守は初めの名を田獄助といひ、後に入道道心と稱した。もと三河阿波兩國の守護職たりし細川讃岐守成光の旗下であつて、三河國碧海郡桑子邑に城砦を築いてそこに居を占めた。文明十一年七月、松平和泉守信光が安祥城を攻め取り、右京高親忠をしてここに居らしめた時、親忠は頻りに山城守道心を召抱へんとしたが、彼は老年の故を以て固く辭して往かず、息藏人正重をしてここに奉仕せしめ、自らは同國碧海郡古針郷に隱居して、文明十八年九月十五日遂に卒去した。法名を融德院道信大居士といつた。その息藏人正重は乃ちその家を嗣いで名を田獄と改め、古針城に移つて松平親忠に奉仕することとなつた。これ阿部家が徳川氏に臣仕するの初めである。かくて文明十八年三月親忠は家督を息長親に譲つたが、明應二年十月今川氏親は北條長氏に命じて岡崎城を攻めた。長氏は先づ大樹寺に陣して岩津左京亮光明がゐる所の岩津城を攻めたので、長親は安祥城に在つて此を聞き、急ぎ後詰として馳せ參じた。此時藏人正重も亦主君長親に従つて大に殊功をあらはしたが、後永正三年九月七日に至り小針城に卒した。法名を勝應院道海大居士といつた。かくして阿部山城守入道道心と息藏人正重との阿部家の遠祖二代の墓碑が、正了、正從の代にその寺域に打建てられたが、ついで藏人正重の息湛太郎正宗（天文十三年八月二十四日卒、法名成德院一海大居士）、同正宗の養息湛太郎正宣（永祿七年十月十日卒、法名永勝院證了居士）、同正宣の息伊豫守正勝（慶長五年四月七日卒、法名龍寶院前豫州太守光譽玉雲大居士）等三代の墓碑



が建てられて、現に當寺門前南側の生垣の内に、かうした阿部家五代の碑が嚴然として存在する以上、當寺の發展過程の上には、かゝる偉大なる財閥があつて、能くこれが力添へを得た事實については、何としても認めねばなるまいやうに思ふ。

正從について願照寺第九世となつた正榮は、享祿四年の出生であつて、正從四十八歳の子である。天正元年の秋四十三歳にして住職となつたが、時正に本願寺石山戰爭の最中であつた。この時三河の僧徒は大に騒ぎ、岡崎城主徳川家康に不敬を働いたといふ嫌疑で、遂に公の怒にふれ悉く闕所を申付けられた。正榮も亦當國を辭し、一時は美濃國中島郡舟橋郷にしりぞいて、茲に假寺を營んだのであつた。謹慎すること正に十一年、毫も反逆の舉に出でず、専ら歸順の意を表した甲斐あつて、天正十一年十二月、五十三歳の時赦免の沙汰を蒙つて歸國した。その後美濃國舟橋の寺跡は一旦三河願照寺の掛處となつたが、後また岐阜に出でて願正寺と號するに至つた。正榮の一生は、願照寺の歴代の中、功績もあつたが辛酸を嘗めたる點に於ては人後に落ちず、實に多難な一生であつた。本願寺の顯、准の二宗主に仕へて、慶長五年九月十九日行年七十歳にて示寂した。

かくて專信の直流としての願照寺は、第九代正榮について正玄をいだしたが、江戸時代に至るや正智、專空、專立、專了等綿々として相繼ぎ、今日に至つたものである。

### 第三章 荒木門徒の移住

古來、親鸞門侶に於ける常隨の高弟として、二十四輩の首位に數へらるゝものに「六老僧」の名目がある。『大谷遺跡錄』によれば前章に述べた三河長瀬の專信に、甲斐等々力の源誓、相模野比の明光、相模山下の了海、武藏麻布の了海、武藏壹木の源海を加へた六人である。以上の中武藏國兒玉郡荒木の源海を中心とする門徒の一團を指して荒木門徒と名くるのであるが、この門徒が常陸國鹿島の順信を中心とする鹿島門徒や、下野國高田の顯智を中心とする高田門徒と共に、いはゆる關東の三門徒として夙に大谷本願維持のために意を注いだことは、本願寺文書所收の弘安三年消息に示すところによつて明らかである。

荒木門徒の始祖源海その人の傳記に就いては、既に源海の滅後、荒木の空運の所望によつて、延文二年三月存覺上人自らが、源海一期の行狀を録して講式に仕組んだことがあり、それより四年の後康安元年四月、再び空運の注意によつて、これに添削を加へたものに謝德講式といふものもあるが、『存覺一期記』存覺六十八歳及び七十二歳の條(參照)若しこれら講式にして初稿本にもせよ、また再治本にもせよ、その内何れかの一つが現存するものであるならば、いかばかり源海傳の上に新しい光明を授けたことであらう。けれどもさうした史料の片鱗すら現存しない今日に於ては、源海の史實を究明せんとすることは甚だ困難である。今本願寺文書や「親鸞門侶交名帳」等確實な史料を中心とし、傍に寺傳といつたやうなものを參考として、一應源海の一生を記述してみたいと思ふ。

## 二

先づ俗姓をいへば藤原家の支流日野氏の出身であつて、諱を光信(親鸞門侶交名帳)とも、また光運(三河如意寺縁起)ともいつた。武藏國荒木の人で、在俗の砌は安藤駿河守隆光と號して鎌倉幕府に仕へ、武藏の一箇國を領

したといふことは、本願寺關係の諸傳の等しく一致するところである。ところが高田の『正統傳』や『正明傳』を始め、『澁谷歷世略傳』には武藏の人とはいはず、彼を近江國荒木の人といつてゐるのは、恐らく建曆二年源海が山科の興正寺を開創したといふ妄説を成立せしめむがために、わざと近江國の産としたものであつて、もとより武藏の荒木であることは申すまでもない。その生誕の年月に就いては、何れの書にも彼をして親鸞聖人面授の弟子たらしめんがために、年代を多少とも以前に遡つた形跡があるから、何れも信用し難いものばかりであるが、本願寺文書の中源海の名の見ゆる弘安三年と正安四年との二つの文書に對照せしめて、殆ど年代の上に兩者の矛盾を感じしめないものは、恐らく『源海因緣』に説く處の嘉禎二年出生説であらう。『源海因緣』といへば、本願寺實悟の輯録した『聖教目錄聞書』の中に「親鸞聖人御因緣並眞佛源海事 一卷」として見ゆるものであつて、その内容が必ずしも正確なる史實を根據としたものでもなく、その當時に於ける民間の傳説を蒐録した所の、いはゆる談義本（一種に過ぎないから、これとても正確にいへば生誕の年時を示したものとも考へられないが、しかし他の有力な史料（本願寺文書）と矛盾せざる限り、今一應この説を採用しておかうと思ふ。

次に彼の出家が何年頃であつたか此亦不明であるが、その原因に就いては何れの書物も愛兒の死別にその動機を求めんとしてゐる。先づこの事情を説くことの最も古くまた最も委しきものは『源海因緣』であるが、若し假りにこの書によるならば、駿河守隆光に花壽と月壽との二人の愛妾があり、花壽は男子花若を生み、月壽は男子月若を生んだ。花若月若の二子は齡九歳にして武藏國慈光山中山院の文珠坊に入り、文武の二道を修行したが、齡十三歳になる頃、兄の花若は母の死にあつて父の隆光に引きとられ、繼母に仕へる身となつたが、彼は我が身の不遇を啣

ち、弟月若を殺し自らも亦相果つるに至つた。この由を鎌倉にて聞き傳へた父の隆光は、やがて遁世して江の島の岩屋に籠り、三年の後相果てた二子の夢告によつて、遂に常陸國の眞佛の許へ走り出家したのだといふ。

以上は『源海因縁』に説く所の源海出家の梗概である。思ふにかうして源海出家の動機を二子の死別にありとする室町中期の傳説は、それ以後に出來た『本願寺通記』『如意寺緣起』『大谷遺跡錄』等皆これを踏襲したものであるが、しかしそれが時代の變遷と共に多少の相違を生ずることは免れぬことであつて、『源海因縁』では花壽月壽の兩人をば妾(前身遊女)としてゐるが、『如意寺緣起』や『大谷遺跡錄』では隆光の二子としてこれを取扱ひ、特に後者では兄弟の名を前後して、兄を月壽といひ弟を華壽といつて、兄は七歳弟は五歳にして同時に相果てたと書いてゐる。そこへ往くと、玄智はその著『本願寺通記』に『連喪二子深厭塵網』と極めて簡明に要領よく書いてゐる。

さて上述の傳説を基調とした談義、本『源海因縁』によれば、彼は眞佛の門に入つて出家したといひ、『本願寺通記』また眞佛に就いて殫染したといふが、これについて今一應の吟味をなし、ついで親鸞聖人面授の弟子たりしや否やの問題にまで、進んで究めてみたいと思ふ。

先づ現存の『親鸞門侶交名帳』の中何れによつてみても、源海は眞佛の附弟であるとして更に親鸞聖人の直弟としては書かれてない。例へば桑子の妙源寺本の如きは、たとへ眞佛の附弟であつても、聖人の面授として明らかなるものには、その肩上に必ずや「上人面授」の四字が書添へられてゐる。ところが荒木の源海だけにそれが省かれてゐるのは、恐らく彼にして親鸞面授の弟子たらざるがためであらう。尤も常陸光明寺本には、その冠頭に「門第六老僧」の名をか、けて、源海を「上人面授」とするけれども、これは後世に於て竄入するところであるから今の問題で

はない。而して本願寺文書に出づる所の眞佛の系譜によれば、

高田眞佛

チャクシ結城西宮信性

信性弟子

武藏 アラキ 源海

源海弟子

アサフ 了海

了海弟子

佛照寺 佛光寺 顯發光照寺三人

とあつて、眞佛、信性、源海、了海と次第するよりみれば、源海は眞佛の嫡子信性の門弟といはねばならぬ。されば源海は信性の弟子たると共にまた眞佛よりも受法した門弟であつて、源海が親鸞面授といふことは猶研究の餘地があり、新しく史料の發見せざる限り、輕々しくここに肯定することは出来ないやうに思ふ。

源海の一生中に於て最も活動した時代は、弘安三年と正安四年の本願寺文書二通によつて考ふれば、大體その間の二十數年間であらうと思ふ。今假りに『源海因縁』の説に従つて、弘安三年が源海四十四歳の時だとすれば、それより六十餘歳に至る二十有餘年間であつて、漸く年齢も進み又思想も圓熟したる老成期に於て、彼は教團護持のため大いにその大任を果し得たことであらう。

弘安三年の文書は荒木門徒を代表した光信即ち源海、鹿島門徒を代表した信海即ち順信、高田門徒を代表した顯智の三人が連署して、大谷本廟に於ける念佛衆の御念佛關忌の事實を注意し諫告したものであつて、表書に「念佛衆徒御中 いなかの人々」とあるから、全く公的の意味を持った書狀である。當時源海は信海、顯智の二人と共に教團の牛耳を握つてゐたもので、本廟維持の上に意を注いだといふよりも、寧ろこれを監督するの重要な地位に

まで進んでゐたといふことが、この一通の文書によつて知らるゝ所である。

次に正安四年の文書は、本廟創立の當初に起つた唯善の騷擾に際し、鹿島の順性を始め、直信、鏡願、妙性、來信、敬信、導信、唯淨、信淨、乘一、慶西、光信、明信、教覺、西光、法智、信入、覺念、西善、證信、覺明等二十一名の門侶が連署した覺惠に對する本廟留守職の承認狀である。この狀の紙背に『惣門弟等連署狀案』とあるから、これら二十一名も亦門弟を代表すべき重要な人々であつたことが知らるゝ。尤も當時は弘安三年を去ること二十年餘であつて、既に顯智、順信等の功勞者は歿して居らず、獨り源海のみがこの連署の中に加はつてゐることは、いかにも時代の推移を想はしむるものがある。

### 三

眞佛の教へを受け、また信性の門に學んで、原始教團に於ける一方の覇者として、絶えず本廟護持のために目覺しい活動を續けた源海の生涯に就いては、上に述べた以外に語るべき何物もない。『澁谷歴世略傳』や、高田の『正統傳』、『正明傳』の著者は、自派に都合のよい傳説を捏造して、その徳をば稱へてゐるけれども、徒らに史實と空想とを混同せしむるのみであつて、益する所は更でない。しかし彼より薰陶を受けた所の門弟については、現存せる各種の『親鸞門侶交名帳』によつて、今日その大部分が知らるゝのは誠に幸ひなことである。

先づ三河妙源寺並に常陸光明寺に傳はる『親鸞門侶交名帳』によると、源海の主要なる門弟として僅に願明、顯性、寂信の三人を擧げてゐるにすぎないが、京都の光蘭院、近江の光照寺光臺寺に傳へらるゝ三種の『親鸞門侶交名帳』によると、以上三人の外更に二十四人を加へて、源海門下の盛況を物語つてゐる。今これらの三本によつて、源海

門下を列擧すれば左の如くである。

寂信、光念、證信、智信、光專、唯性、光善、願信、覺念、唯佛、信證、覺性、信明、光乘、圓智、願明（了海）、顯性、覺善、光善、教佛、證信、覺願、圓密、覺明、光寂、光專、證圓（以上二十七人）

以上の中有名なのは武藏國阿佐布の願明即ち了海であつて、この人は後世佛光寺派より佛光寺第四世として、列祖の中に加はり崇められた方である。猶この外に甲斐國等々万福寺所傳の『親鸞門侶交名帳』といふものがある。今該本を以て以上の三本に比較するに、源海の門下及びその系統を特に詳出することによつて、全くそれらと同系のものと考へられるのであるが、しかし甲斐本には少からず改竄の痕が見えるので、かの三本に比しては著しく史料的价值が下つてゐるやうに思ふ。先づ萬福寺本の光信即ち源海の右肩にある「萬福寺源海」の細註は、寺傳を生（い）かさんがために、わざと「ムサシノクニアラキノ源海」の文字を改作したことは明らかである。光蘭院等の三本には、覺善の門下に覺忍あり、光善の門下に光寂あり、教佛の門下に教覺ありて、覺忍、光寂、教覺の三人はそれぞれ源海の孫弟だとするけれども、萬福寺本に於てはこれを悉く源海直弟の列に加へ、また門弟圓智を圓明として掲げるが如きは、全く萬福寺本の誤謬であらうと思ふ。

かくて『親鸞門侶交名帳』によつて源海の門弟二十七人を知ることが得たが、猶その他に於てもないことはない。『武州荒木滿福寺寺代記』によると、源海を開基として海圓、海信の名をかゝけ、『本願寺通記』にも亦「創滿福寺屬之弟子海信」とあるから、海圓と海信とは共に源海の直弟といはねばなるまい。三河國西加茂郡石野村大字力石如意寺に、足利初期を下らざる光明本尊一幅を所藏してゐるが、その畫面の左方部（向つて右方）に於て眞佛、源海、海

圓、海信等の四つの影像が描かれてある。思ふにこれは海圓、海信の兩人が源海の弟子たることを裏書するものでなくして何であらうぞ。尙親鸞門下の六老僧の一として數へらるゝ甲斐の源誓についてみるに、『本願寺通記』卷七には、

「一云源海有二弟子、一曰源誓主萬福寺、一曰了海主善福寺。」

とあり、また甲州萬福寺所藏の鎌倉末期の文書にもその名が見ゆるのであるから、源誓も亦源海の門弟でありしことには疑ひなからうと思ふ。

かくの如く、數多の門弟を有し、その一生を教團の護持に捧げた源海が、いつ、どこで歿したのであるのか明らかでない。既に正安四年の本願寺文書にその名を刻ねてゐる以上、その歿年がそれ以後であることは申すまでもない。今若し『如意寺緣起』によれば、源海は既に建長五年十月二十二日七十八歳で往生したといふから、正安四年の連署が死後四十九年目となつて、矛盾も亦甚だしく、『澁谷歷世略傳』『眞宗分流記』『本願寺通記』等の三書も亦その歿年を弘安元年といつてゐるから、何れも正安四年に先立つこと二十四年となつて、全く史實に合はないことになる。而してその享壽年齢についても各々説を異にし、『本願寺通記』は五十八歳説、『澁谷傳』は九十歳説、『眞宗分流記』は五十歳説をとつてゐるが、しかしそれがどれだけの史的根據をもつものか、一向に知る由もない。

上來杜撰ながら武藏國荒木門徒の始祖源海傳について、簡單なる一瞥を與へたのであるが、かくも多士濟々數多の門弟を有したりし荒木門徒の一團が、源海の歿後、我が中世の眞宗史の上に、如何やうに活躍し如何やうに凋落したものが、今それらについては史料の缺けた今日、明白なる回答を下すことは出来ないが、少くとも、その門弟



の中に於て、了海を中心とする阿佐布門徒、玄誓を中心とする甲斐門徒、荒木滿福寺の移轉によつて生じたる三河門徒、かうした三つの門徒は明らかに荒木門徒の分裂發展途上に於ける三根幹をなすものであつて、各々その地に信仰的地盤を得て、益々榮えて往つたものである。阿佐布門徒は今日の佛光寺の源流をなし、甲斐門徒は今日の萬福寺の源泉をなすものであるが、荒木門徒の中心本坊たる滿福寺が、三河の北部へ移轉することによつて發展した一面は、三河眞宗史上重要な位置を占むるものであるから、以下これについて少しく考察してみたいと思ふ。

#### 四

本派の史學者玄智景耀の『本願寺通記』によると、源海は文永年中、武州兒玉郡荒木村に滿福寺を創して、これを弟子海信に附屬したとあるが、しかし『武州荒木滿福寺年代記』によると、滿福寺の世代が源海、海圓、海信と次第相承する以上、源海の跡を受けたものは、弟子の海圓であつて、海圓から弟子海信に傳へたものと見る方が恐らく妥當であらうと思ふ。海圓、海信についてはその事蹟甚だ明瞭を缺き、僅に『寺代記』に海圓は正應三年庚寅八月二十三日六十八歳にて歿し、海信は嘉元二年甲辰二月十九日四十三歳にて歿したといふだけであるが、これとても寺傳の示す所であるから、輕々しく信することは出来ないのである。海信について滿福寺の第四代となつたのは空選であつて諱を範盛といつた。彼は源海一期の行狀を構式に作らうがために、延文二年と康安元年の兩度までも京へ上りて、存覺上人に懇願したといふ事實は前に既にいふ通りであるが、これには當寺開基の恩徳を謝せんが爲と、また以て荒木門徒の發展に資せんとした一面のあることを忘れてはならぬ。寺傳によれば空選は正中元年甲子三月十七日六十歳にして歿したといふが、しかしそれより三十七年後の康安元年に、存覺上人から「謝徳講式」を御免にな

つてゐるから、かうした歿年も全く史實に根據のない荒唐無稽の妄説といはねばなるまい。

ついで満福寺の第五代を董した人に教密といふものがある。教密は諱を了感(又は了勵)と言つたが、満福寺の寺基を武藏の荒木から三河國加茂郡花本の青木ヶ原へ移轉を敢行した人であつて、荒木門徒の教線擴張については一方ならぬ苦心を嘗めた方である。しかしながら教密の事蹟については一つとして確實な史料がないから、止むなく三河國如意寺に傳はる傳説を骨子として、一應その概略を述べて見ようと思ふ。

## 五

鎌倉の末葉正中の頃、荒木の空遜は自ら眞影を奉持して上洛したが、その途中に於て死せるにや、幾日を経ても歸國せぬので、その子の教密は遂に父を案じて都へ上つた。しかし尋ぬる父には廻り合ふ事を得ず、空しく歸國の旅路についたが、三州加茂郡衣(今は舉母と書く)の領主に中條備前守判官長季といふものがあり、それが丁度母の兄即ち正しき伯父に當るので、途中にして彼は長季の居城衣の里を訪ぬることとなつた。この時長季は今や父なき教密の心情を憐んで、遠國にあらむよりも寧ろ京都の御本寺に近き所の三河國へ寺基の移轉を勧めた。そこで教密は長季の所領なる青木原を開いて一字を建立し、寺前に花本村を作るに至つたが、この時長季からは越出村(今の越戸をいふ。越戸村の西北、梅坪の東北に當り海山田面といふ所あり、正しくその處なりといふ)を寺領として寄附された。時に正中二年であつた。かくて教密は上洛して満福寺移轉の顛末を覺如宗主に申上げた所、宗主の御感料ならず、その時御褒美の品として如の一字を賜はり、これより満福寺を改めて如意寺の寺號を稱することになつたといふ。

其の後幾何もなくして中條氏は没落したけれども、源海の遺蹟としての如意寺は次第に榮えて、その教化は遠く尾三兩州にまで及んだのであつた。しかるに來集の人々の中に、寺領について私曲を構へ怨みを結ぶの輩が出来たので、再び寺基を青木原の東北四十餘町の山中志多利郷（今は枝下と書く）に移して、其の地に寺院を構へた。時に貞和元年であつたが、此の時も亦本堂、太子堂、拾骨堂、對屋、庫裡等の諸堂は何れも青木原に於けるが如く完備した。かくて教密は如來傳、太子傳、法然傳、宗祖傳を何れも三幅對にして合計十二幅を所望して本寺より御免になつたが（今は宗祖傳のみ存する）彼はその一生に於て、武藏の滿福寺を移轉し如意寺を創立したといふ不朽の功績を残して、遂に應安元年戊申十月二日七十歳にして往生したのだといふ。

以上は三河如意寺に傳來する『滿福寺寺代記』に載せられた教密傳の大略である。

先づその中に於て滿福寺空還は上洛して行方不明になつたといふが、しかし前にもいへるが如く一方同寺の寺傳によれば彼は正中元年甲子三月十七日六十歳にして歿したとある。生死不明の者に歿年が明記さるゝといふことはまことに不思議である。しかもその歿年たるや全く『存覺一期記』に記載するところの延文康安兩度上洛の事實に相違し、正中元年といへば猶それよりも三十七年以前（康安元年より逆算）に遡らねばならぬほどの矛盾が生じて來るではないか。

また空還内房の兄だといふ賀茂郡衣の城主中條備前守長季は、出羽守景長の嗣子で父に繼いで衣城主となつたものであるが、『尊卑分脈』によつてその家系を示さば左の如くである。

秀長	景長	長宗
左衛門尉 常陸前司	延慶年中衣城二住 左衛門尉、出羽守 從五位下	伊豆守 從四位下
秀孝	時長	長季
左衛門尉	伊豆守 從五位下	左衛門兵庫頭 從五位下

抑々中條氏といへば、それがいつの時代から三河に來住したものか詳らかでないが、『尊卑分脈』には出羽守景長が延慶年中(花園天皇)に衣城に住むとしるし、また三河國加茂郡猿投村の猿投神社に「延慶二年三月廿五日從五位下前出羽守景長」と署名した寄進狀(但し、寫し)もあるから、恐らくこの景長の時に參河の代官に補せられ、衣城に居城してゐたものであらう。かの織田信長公の畫像を藏せるを以て有名なる賀茂郡舉母町の集雲山長興寺は、建武二年正月の中條備前守秀長が聖一國師の弟子大陽義沖を聘して創立したものだと傳へ、現に貞和四年九月十八日附の秀長の寄進狀(猿投神社藏)もあり、またその墳墓と稱するものもある。『閼太曆 康永元年八月廿九日天龍寺供養の條に見ゆる中條備前守は即ち秀長のことで、猿投神社に藏する所の「建武四年十一月十五日」と「文和三年七月廿三日」の二つの寄進狀、ならびに同社所藏の文和元年十一月廿八日の別當職補任狀は何れも秀長のものである。かくの如く中條氏在住の關係から、當地方には中條氏に關係した史料がなかくに多いが、しかし教密の伯父と傳へら

る、中條兵庫頭長季に關係した文書に至つては、不幸にして予は未だ眼福を得たことはない。

猿投神社の所藏にかゝる『結願次第』一帖の奥書には「永享十二年六月十九日中條兵庫頭」とあるが、これが果して中條長季のものであるかどうかは疑問であつて、景長の子の長季としては餘りに年代が下るやうに思はれる。

『滿濟准后日記』の永享七年正月廿四日の條を見るに、貢馬のことについて、中條氏が數代これを進獻したのであるが、中條入道が上意に叛いて（鎌倉府足利持氏に通じたる嫌疑による）切腹するに至り、遂にその跡である三河國高橋庄をば一色左京大夫が拜領した。仍てこれまでの中條氏に代り、一色左京大夫をして貢馬進獻せしむるやう命ぜられたとのことを記載してある。これによると中條氏の没落は永享七年であるから、今の『寺代記』に中條氏が正中二年から貞和元年までの間に亡びたといふのは、どうも史實に合はないやうに考へられてならぬ。

かうした寺傳といふものを、どこ／＼までも究明して行く時には、その大半はやがて史實としていかかはしいものになつてしまふが、しかし今たとへさうした寺傳の粉飾のすべてを洗ひ落してしまつても、教密なるものが武藏國荒木道場の移轉を企て、以て三河に於ける教線の擴張を志したことだけは、何としても否定し得ざる事實であらうと思ふ。それを裏書するものは、現に三河國賀茂郡石野村如意寺に藏する所の文和三年の古文書である。

【武藏】荒木源海聖人門徒

三州高橋庄志多利郷如意寺常住物也

大勸進如意寺住侶釋教蜜了勘

大壇那尾州彌作久住

大谷學報 第十七卷 第三號

慶善房 (空カ)  
圓覺尼

圓光房 空信尼

大施主富田性善房門弟

性蜜尼

明空房

明教房 (一字不明)  
教□尼

道蜜房 法空尼

明圓房 教法尼

明覺房

此外諸衆同行略之

文和三年甲午十月廿一日

これは縦七寸四分、横一尺四寸の絹地に書かれたもので、果してこれが文和當時のものであるかどうかは疑問であるが、しかしその内容に於ては後世の偽作とも考へられず、大に參考に資すべきものがある。今此の古文書によつて見るに、第五世教密の時代に高橋庄志多利郷を中心として眞宗勃興の氣運漲り、その教線は三河の西北部から遠く尾張まで及んだことがわかるが、如意寺の教密を初めとして、こゝに擧げられた尾張彌作久の慶善房等の四人や、富田性善房の門弟性蜜尼等の九人は、何れも志多利郷を中心とする三河門徒の錚々たるものであつたであらう。如

意寺の在所と傳へらるゝ高橋庄志多利郷については、「志多利」は今枝下の字を用ひ、現に「東枝下」の小字には寺屋敷、鐘鐺場等の地名が残り、その當時の御水（井戸）の跡さへ残り存してゐる以上、當寺がもと志多利郷にあつたといふことには疑ふ餘地がない。文中にある尾州彌作久とはヤザコと讀むのであつて、尾張國愛知郡日進村の小字の名である。性善房の住んだ所の富田といふは、今の如意寺から僅に一里程の距離にある石野村大字富田のことである。性善は『三河念佛相承日記』に見ゆる性善房樂智のことであつて、その後下野國高田に赴いて病歿したのである。『三河念佛相承日記』に「ソノ門流田舎ニアリ」といふのは、恐らくこの文書に見ゆる性善房の門弟たる富田門徒を指したものであらうと思はれ、三河の和田や桑子等の鎌倉街道筋から見て、富田あたりは三河の北山の奥地であるから、これを田舎と言つたものであらう。

## 六

斯くの如く如意寺の第五世教密によつて、三河の西北部に於ける眞宗教團の基礎全く成り、慶善、圓光、性善、圓覺等の寺家門弟の上首相繼いで輩出するに至り、當寺は益々發展の域に向つたが、第六世教了房範信（至徳三年三月十日六十歳示寂）、第七世了念房範尙（應永二十年九月廿三日五十八歳示寂）、第八世了淨房源可（文正元年二月五日七十三歳示寂）の三代を過ぎて、第九世淨念房源壽の時に至るや、本願寺實如宗主よりは改めて繪像本尊の裏書を御免になつた。これは從來當寺所藏の本尊には裏書といふものがなかつたのだが、此の時初めて御免になつたものであつて、今現に如意寺に傳はる所の「改號本尊」の御裏と稱するものが即ちそれであるといふ。

## （改號本尊御裏）

大谷本願寺釋實如(花押)

永正十五戊寅正月廿八日

方便法身尊像 荒木滿福寺改號

三河國賀茂郡

高橋庄志多利郷

如意寺常住物也

願主 釋 淨念

ついで第十世となつた明教房範壽(天文七年六月廿九日五十五歳示寂)は先代淨念房の長子であるが、先祖と豪族中條氏との古き因縁から、進んで中條若狭守の娘を娶り、第十一世明欣房も亦加納中條家の娘を娶つて、中條家と如意寺との關係はいやましに密接となり、寺基は益々強固となつたが、江戸時代に至るや、第十三世源真房(明暦三年正月晦日七十八歳示寂)の時に再び地域を西賀茂郡石野村大字下瀬に移して、遂に今日に至つたものである。

(つゞく)